

結核予防の功績

や な ぎ さ わ け ん
柳 沢 謙

柳沢謙は、明治 40 年保坂祐吉・カスの七男として戸野目(四ヶ所)に生を受けた。保坂家は「薬種屋」と呼ばれ、本家は県内屈指の大地主・保坂家である。

謙は生後間もなく、生家に近い柳沢医院の養子となったが、若くして、養父、実父母を次々と失う不幸に遭う。とりわけ実母は、結核に苦しみ亡くなった。

医者を目指して東京帝国大学医学部に入った謙は、実母の命を奪った結核の研究に没頭する。昭和 6 年同大学を卒業、更に結核の研究を続けるために同大学伝染病研究所の技師となり、「乾燥 BCG ワクチンの製造方法に関する研究」により朝日賞を受賞するなど、結核予防の研究と実践にあたった。

戦後、国立予防衛生研究所に勤務、昭和 45 年に同所長となり、世界保健機構(WHO) 総会日本代表を務めるなど、これらの功績が認められて昭和 52 年「勲二等旭日重光章」を授与された。

この間、昭和 16 年から母校戸野目小学校児童への BCG 接種を始め、村内外の人々を無料で診察、投薬したことは有名な話である。

結核のほか、ハンセン病、ポリオの研究も続けたが、昭和 57 年、心臓発作により 75 歳の生涯を閉じた。



上越市 HP(中部まちづくりセンター)
から抜粋

戦争の時代を 外交手腕で乗り越えた

よしざわ けんきち
芳澤 謙吉

芳澤謙吉は、1874年(明治7)諏訪村堀之内(現・上越市諏訪)の地主の家に生まれた。第五中学区高田学校(後・高田中学校、現・県立高田高等学校)を経て上京。東京英語学校などを経て東京帝国大学へ入学。1899年(明治32)外務省に入省、外交官としての長い人生を歩み始めた。



諏訪小学校 HP から抜粋

上海赴任中は、日露戦争に向かって緊張を高めつつあった大陸外交の重要問題解決のために奔走している。その後ロンドン駐英大使館へ一等書記官として赴任する直前、当時国会議員だった犬養毅の長女・操(みさお)と結婚。2度のロンドン赴任ののち、諸外国による外圧と内乱とによってさらに緊張度を増す中国の北京公使館へ赴任し、政務局長・北京公使などを歴任した。

1931年(昭和6)、満州事変が勃発。国際連盟理事会出席中だった謙吉はその抗弁に苦慮した。時代は軍部の台頭によって次第に戦時色を強めていた。その年の暮れ、犬養内閣発足にあたって謙吉は外務大臣に就任した。その翌年には軍部の独断によって満州国が独立。5月15日、軍部の拡大を懸念していた犬養首相は海軍の青年将校にピストルで撃たれて命を落とした。

犬養内閣の総辞職に伴って、謙吉も外務大臣を辞職。その後は貴族院議員となり、日中戦争から太平洋戦争へと戦線が膨張する中、外交の専門家としてオランダやフランスなどと困難な交渉に当たった。終戦時には枢密顧問官を務め、戦後は公職追放となったが、1952年(昭和27)にはその優れた外交能力を請われて、初代中華大使に任命され台湾に赴任。1956年(昭和31)にその職も辞し、58年間にもわたった外交官人生にピリオドを打った。

有恒学者を 創設した教育者

増村 朴齋

1868 年(明治元)増村 朴齋 (本名 度次)は、針村 (現・板倉区針)で父増村度弘、母ちくの次男に生まれた。朴齋は針小学校に入後、8 歳で諏訪神社大 ^{のぼり} 幟の文字を書き、11 歳で漢詩を作るなど村民から神童と称された。



上越市 HP(板倉区)から抜粋

朴齋は、14 歳で上京して国学者 ^{なんまうほう} 南摩羽峯の教えを受け、15 歳で大養村百間町 (現・頸城区 百間町)の井部

健齋の温知塾に学んだ。さらに、1885 年(明治 18)朴齋は再び上京し、羽峯の助言を受けて ^{しぶんこう} 斯文龔に学んだ。ここで郷土子弟を育てる夢を育み、とくに明六社の啓蒙思想家である西村茂樹から有恒学舎教育の支柱となる道德至上主義を学んだ。この教えは、「先公後私」など有恒精神「三綱領」として現在も受け継がれている。

1895 年(明治 28)朴齋は、新潟県から有恒学舎設立認可を受け、翌年 4 月 10 日針の浄覚寺を仮校舎に有恒学舎を開学。5 月には勝海舟書「有恒学舎」の額が哲学館大学(現・東洋大学)創立者である井上円了から届けられ、7 月 29 日に沖ノ宮校舎が完成して盛大な開校式が行われた。

朴齋は、自ら倫理の授業を受け持ち、力量ある教師を全国から招いた。会津八一は、1906 年(明治 39)から 4 年間英語教師として教壇に立った。また、新渡戸稲造、徳富蘇峰ら多くの著名人が学舎を訪れた。

1921 年(大正 10)朴齋は、新潟県教育会長に就任し、その後も中頸城郡教育会長など要職を務め郷土の教育に尽力した。朴齋は 1942 年(昭和 17)74 歳で亡くなったが、有恒学舎は 1964 年(昭和 39)県立有恒高等学校となり、朴齋の建学精神は引き継がれた。

まえじま
前島

日本近代郵便制度の父

ひそか
密

前島密は、まだ江戸時代だった 1835 年(天保 6)、高田に近い下池部村(現・上越市下池部)の上野家に生まれ、房五郎と名づけられた。高田の私塾・文武済美堂ぶんぶせいみどうに通い、さらに江戸に出て医学や外国語の勉強を続けた。江戸で、ペリー来航の騒ぎを目の当たりにした房五郎は、外国に関する知識が必要であることを痛切に感じ、諸国を遍歴して知識や技術を身につけていった。



上越市 HP(中部まちづくりセンター)から抜粋

1866 年(慶応 2)、房五郎は幕臣前島家の養子となり、名前を「来輔」、さらに「密」と改める。外国語に堪能だった密は、日本人が漢字やひらがななど複数の文字を学ばなければならないことを無駄と考え、かなだけを学べばよいという意見書を将軍に提出している。また、明治政府が成立した直後には、新政府が大阪への遷都を考えていることを知り、東京への遷都を強く訴えている。

江戸時代、手紙は飛脚が運んでいたが、主要な都市の間でしか利用できず、届かない場合もしばしばあった。明治政府に任官を果たした密は、郵便制度の確立に奔走。飛脚制度を廃止し、「郵便」「切手」「はがき」などの名称を定めた。消印や特定郵便局の制度も密によるものである。こうして 1872 年(明治 5)には日本全国津々浦々にいたるまで、同じ料金で手紙が配達される郵便制度がスタートした。

このほか密の業績は、現在の日本通運や日本郵船の土台となる会社の設立、北越鉄道の開通などの物流分野のみならず、東京専門学校(現・早稲田大学)の二代校長への就任、盲啞学校の創立など教育分野にも及んでいる。

1902年(明治35)には男爵の位を授与され、晩年は貴族院議員としても活躍した。日本の近代化に数々の貢献をした密は、1919年(大正8)、神奈川県の別荘で死去した。

参考：上越市ホームページ(上越市立歴史博物館) / お が わ み め い 上越市の近代を拓いた先人たち

日本児童文学の父 小川 未明

1882年(明治15)4月7日小川未明(本名健作)は、高城村大字五分一(現・上越市幸町)に父澄晴、母チヨの長男として生まれた。待望の子どもであった未明は、「捨て子は育つ」という当時の慣習により、3歳になる頃まで隣家に預けられた。岡島小学校(現・大手町小学校)を経て高田中学校(現・高田高等学校)に学び、1901年(明治34)、東京専門学校(現・早稲田大学)文科に入学。未明は、少年時代を過ごした上越の自然と思い出を多くの作品に投影させている。



上越市 HP(小川未明文学館)から抜粋

1902年(明治35)、早稲田大学と改称後、未明は英文科に転科し、生涯の師坪内 逍遙つぼうちしょうようと出会う。未明は、逍遙指導のもと、小説の創作に没頭し、1904年(明治37)には、文壇への処女作「漂浪児」を発表。この時、逍遙が贈った筆名が「び め い未明」だった。

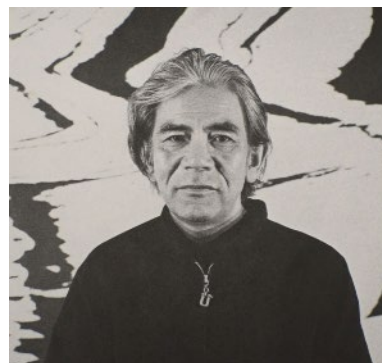
1907年(明治40)には、第一短篇集『愁人』を刊行し、その後は、時に幻想性を帯びつつも、社会主義的ヒューマニズムに裏打ちされた作品を次々と発表。1906年(明治39)未明は島村抱月の勧めにより「少年文庫」(早稲田文学社)の編集に携わる。これを契機に童話創作にも力を注ぎ、1910年(明治43)には童話集『赤い船』(京文堂)を出版、大正期に入ると「赤い蠟燭と人魚」、「月夜と眼鏡」など現在も読み継がれる傑作の数々を生み出した。1926年(大正15)、未明は「今後を童話作家に」(「東京日日新聞」)を発表、小説の筆を断ち、童話一本で活動していく決意を示した。

戦後は、児童文学の発展に力を注いだ長年の功績が認められ、1951年(昭和26)芸術院賞を受賞、1953年(昭和28)には文化功労者に選ばれた。故郷の春

日山神社には、1956 年(昭和 31)、「雲の如く」の詩碑が建てられ、除幕式には未明本人も出席した。その 5 年後、1961 年(昭和 36)5 月 11 日、東京高円寺の自宅で 79 歳の生涯を閉じた。

と み お か そ う
トミオカ・ホワイト 富岡 惣
い ち ろ う
一郎

富岡は、1922 年(大正 11 年)に新潟県高田市南本町(現・上越市)で生まれた。新潟県立 高田商工学校卒業後は、三菱化成工業に勤務の傍ら独学で絵を学んだ。



小林古径記念美術館 / 生誕 100 年富岡惣一郎展 での展示写真より

1963 年(昭和 38 年)、第 7 回サンパウロ国際ビエンナーレ展に出品した「永遠の流れ」が近代美術館賞を受賞したことで国際的な注目を浴びると、1965 年(昭和 40 年)には長年勤めていた会社を退職し、新天地・ニューヨークへ活動の舞台を移した。

雪の美しさに惹かれ、「白」という色彩に魅せられた富岡は、白色絵具が持つ黄変・亀裂・剥落という欠点を克服した油絵具「トミオカ・ホワイト」を開発する。この絵具と、特注のパレットナイフを用いて独自の「白の世界」を築き上げた富岡の作品は、移住先のアメリカで「東洋の白」と絶賛され、高い評価を得た。

1972 年(昭和 47 年)の帰国の後は、北海道、東北、中部など、国内各地の雪景を取材した成果を「雪国シリーズ」として発表。また、世界中の誰も描いていない「白の世界」を求めて、ヘリコプターやセスナ機による上空からの取材を行うなど、様々な方法を駆使して雪の「白」に迫った。

参考：上越市ホームページ(小林古径記念美術館) / 生誕 100 年富岡惣一郎展 白、追い求めて